

科目名	途上国社会経済論	2 単位
担当者	秋吉 恵	
テーマ	グローバル化が途上国の小農や零細農・労働者階層に与える影響	
科目のねらい	<p><キーワード> 途上国、都市、農村 小規模農家 農業生産活動 グローバル市場 地域社会</p> <p><内容の要約> 本科目では、発展途上国の社会経済開発の諸問題について学ぶことを目的とする。ただし、途上国が直面する開発問題は多様なため、本科目では、貧困層の7割が居住するとされる途上国農村の小農めぐる開発問題に焦点を絞る。 家族を基幹労働力とした農業生産活動を行う経済主体である小農が、1980年代以降、グローバルな市場と直接間接につながることで、どのようなインパクトを受けたか。アジア、アフリカ、ラテンアメリカでの実態分析事例をもとに、小農を取り巻く地域社会システムとそのグローバリゼーションによる変容を読み解く。</p> <p><学習目標> ・ グローバル市場と途上国生産者とのつながりを、社会開発の視点から理解できる。 ・ 発展途上国の各地域における小農や貧困層をめぐる社会のありようを多角的に分析できる。 ・ 各人のそれまでの現場の経験や実践事例を、相対化するための視点を持つ。</p>	
授業の進め方	<p>講義では、第1回から第7回までを、以下の内容で実施する。2回から7回については、指定された論文について2週間をかけて学ぶ。1週目が論文の要約と疑問点の提示、対象となる途上国やグローバル商品についての情報交換、2週目が先にあげた論文に関わる疑問点についての議論を行う。</p> <p>第1回：オリエンテーション：本科目の狙いと、教員および各受講生について共有する。 第2回テキスト分析：グローバル化と途上国の小農 第3回テキスト分析：エチオピアのコーヒー生産者とフェアトレード 第4回テキスト分析：マラウイにおけるタバコ生産の自由化と小農 第5回テキスト分析：ミャンマーにおけるエビ輸出拡大と小規模漁民 第6回テキスト分析：タイにおけるアグリビジネスによる契約養鶏と小農 第7回テキスト分析：インド・デリー市におけるサイクルリキシャ業 第8回：学びのふりかえり 都市部貧困層や農村部小農・零細農に対するグローバル化の影響について考える<履修生からの発信と議論></p>	
事前学習の内容・学習上の注意	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第2回授業までにテキストの各章および指定する論文の中から、受講生は各自、担当したいテキストを選ぶ。 ・ 各回の担当者は、指定された回に、当該テキストの要約と疑問点を掲示板に提示する。 ・ 各回で取り上げられるテキストを、事前に読み込み、テキスト内容に対する自分の経験や知識に基づくコメントを掲示板に提示する。 ・ 受講生は、自らが研究対象としている国や地域、人々を念頭において、課題や議論に参加することが望まれる。 	
本科目の関連科目	開発研究入門、地域社会システム論、地域社会開発論、開発組織・制度論	
テキスト	<p>各テキストは、各分野における公表論文を掲示板や資料ページに提示し、各履修生がダウンロードして使用する。</p> <p>本科目で取り扱う視点としては、第2回テキスト、研究叢書『グローバル化と途上国の小農』アジア経済研究所 ISBN978-4-258-04560-0 の序章を参考にすること。</p> <p>本論文は、アジア経済研究所の Web サイトからダウンロード可能。 http://www.ide.go.jp/Japanese/Publish/Books/Sousho/560.html</p>	

参考文献	テキストで取り上げる国や農作物、水産物、労働に関わる論文など、各章の分析に必要と思われる参考文献は随時、提示する。
成績評価方法 と基準	各受講生が担当する章および論文の要約、疑問点、コメントの提示（40 点） 提示された要約等に対する自分の経験や知識に基づくコメントなど、議論への参加度（30 点） 期末レポート（30 点）

科目名	開発組織・制度論	2 単位
担当者	雨森孝悦	
テーマ	貧困な人びとの行動を理解し、貧困削減につなげる	
科目のねらい	<p><キーワード></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 行動経済学 2. 貧困削減政策 3. ランダム化対照試行 4. 起業 5. マイクロファイナンス <p><内容の要約></p> <p>貧困な人々の実際の姿や行動について何十年もの間、研究や実践が積み重ねられてきた。にもかかわらず、従来かならずしも真相に迫ることができていなかった。</p> <p>この科目では、急速に発達しつつある行動経済学によって明らかにされてきた貧困な人びとの行動特性について学ぶ。テキストで扱われている題材は保健、教育、人口問題、マイクロファイナンス、起業、ガバナンスなど多岐にわたる。どの領域においても、豊富で緻密な実証分析に加え、フィールド調査によって裏付けられた、目から鱗の落ちる記述がある。語り口は平易で難しい数式も出てこないが、精読しないと著者の真意は伝わらないだろう。この良書をみんなで読み込み、主要な論点について議論を行い、貧困対策のフロンティアに赴きたい。</p> <p><学習目標></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 履修者は、貧困な人々の実際の行動に関する新しい理論と知見の基礎を理解する。 ・ 履修者は、貧困削減を目指す政策や制度の設計にあたり、留意すべき点について理解する。 	
授業の進め方	<p>第1回 はじめに（オリエンテーション）</p> <p>第2回 第1章 もう一度考え直そう、もう一度（第1部 個人の暮らし）</p> <p>第3回 第2章 10億人が飢えている？</p> <p>第4回 第3章 お手軽に(世界の)健康を増進？（前半）</p> <p>第5回 第3章 お手軽に(世界の)健康を増進？（後半）</p> <p>第6回 第4章 クラスで一番（前半）</p> <p>第7回 第4章 クラスで一番（後半）</p> <p>第8回 第5章 スダルノさんの大家族（前半）</p> <p>第9回 第5章 スダルノさんの大家族（後半）</p> <p>（第2部 制度）</p> <p>第10回 第6章 はだしのファンドマネージャ</p> <p>第11回 第7章 カブールから来た男とインドの宦官たち（前半）</p> <p>第12回 第7章 カブールから来た男とインドの宦官たち（後半）</p> <p>第13回 第8章 レンガひとつずつ貯蓄起業家たちは気乗り薄（前半）</p> <p>第14回 第9章 起業家たちは気乗り薄（前半）</p> <p>第15回 第9章 起業家たちは気乗り薄（後半）</p> <p>第16回 第10章 政策と政治（前半）</p> <p>第17回 第10章 政策と政治（後半）</p> <p>※履修者の人数によって進行を変える可能性もあります。</p>	
事前学習の内容・学習上の注意	テキストをできるだけ早く入手し、事前に読んでおくこと。自分の担当する章だけでなく、すべてを予め熟読することが議論参加の前提となる。	
本科目の関連科目	マイクロファイナンス論	
テキスト	アビジット・V・バナジー／エステル・デュフロ著（2012）『貧乏人の経済学 もういちど貧困問題を根っこから考える』みすず書房	
参考文献	<p>Banerjee, Abhijit V., and Esther Duflo (2011) <i>Poor Economics: A Radical Rethinking of the Way to Fight Global Poverty</i>, Public Affairs. (英文原著)</p> <p>J.モーダック他（2011）『最底辺のポートフォリオ 1日2ドルで暮らすということ』みすず書房</p> <p>Glennerster, Rachel, and Kudzai Takavarasha (2013), <i>Running Randomized Evaluations: A Practical Guide</i>, Princeton University Press</p> <p>その他、授業中に適宜、参考文献を示す。</p>	

成績評価方法 と基準	成績評価は、この授業への参加度と期末レポートをもとに行う。 1) 期末レポート (60 点) 2) ディスカッションへの参加と貢献 (40 点) 総合評価 60 点以上を合格とする。ただし、最低限の回数の発表と議論を行うことが前提であり、それをしないと期末レポート提出権がない。
-----------------------	---

科目名	地域社会システム論	2 単位
担当者	斎藤 千宏	
テーマ	アフリカの地域社会組織を理解し開発支援実践に活かそう。	
科目のねらい	<p><キーワード>地域社会システム アフリカの「地域社会」 参加型開発 公共圏</p> <p><内容の要約> 経済自由化や民主化が歴史的にも文化的にも異なる背景をもつアフリカ各国に導入されてきた。その過程において異なる政治経済構造の下、農村地域社会はどのように対応したか、またどう対抗してきたのかを、「公共圏」の議論を踏まえながら検討し学ぶ。</p> <p><学習目標> アフリカの地域社会を開発事業と関連付けて理解できる。 社会科学的方法論に基づきフィールドワークを設計・実施できる。 アフリカ以外の地域での開発支援活動でも応用がきくようになる。</p>	
授業の 進め方	<p>第1回～第5回 パート1 アフリカの地域社会を中心に討論。 第6回～第9回 パート2 市場化の影響と地域開発組織を中心に討論。 第10回～第14回 パート3 政治と地域開発組織を中心に討論。 第15回 まとめ</p>	
事前学習の内容・ 学習上の注意	国内であれ国外であれ地域社会とかかわって仕事をしたことがある人は、自身の経験を整理しておくこと。テキストの舞台がアフリカなので、アフリカで活動いたことがある履修生討論をリードしてくれることを望みます。	
本科目の 関連科目	参加型開発論、地域社会開発論など	
テキスト	『現代アフリカ農村と公共圏』児玉由佳編、アジア経済研究所、2009年	
参考文献	『福祉社会開発学の構築』とくに第8章（余語トシヒロ著）、日本福祉大学 COE 推進委員会編、ミネルヴァ書房、2005年	
成績評価方法 と基準	ディスカッションへの参加度（40%）、提出レポート（60%）をもとに評価を行い、全体で60ポイント以上を獲得した者は合格とする。	

科目名	開発経済論	2 単位
担当者	森澤恵子	
テーマ	開発途上国の経済発展と貧困削減をいかに実現するかを開発経済論の系譜からひも解き、21世紀の途上国の経済発展の方向性を探る。	
科目のねらい	<p><キーワード> 発展途上国、開発政策、貧困削減、経済成長、持続的発展、統治</p> <p><内容の要約></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 現在の開発経済学が対象とする多領域にわたる諸課題を簡略にサーベイする。 2. 独立以降の経済開発政策と開発経済学の変遷と両者の関係、開発政策が実際の開発に及した結果について考察を深める。 3. 最新の経済開発論の主要論点を世銀の開発報告書から読み解く。 <p><学習目標></p> <p>開発経済政策の変遷とそれに対応する開発経済学の変遷、諸潮流について理解を深めたうえで、21世紀における途上国の経済発展の新たな方向性について議論できるようにする。</p>	
授業の進め方	<p>第1回 導入</p> <p>第2回 開発経済学は今、何を課題としているか1 『テキストブック開発経済学』</p> <p>第3回 開発経済学は今、何を課題としているか2 『テキストブック開発経済学』</p> <p>第4回 開発経済学は今、何を課題としているか3 『テキストブック開発経済学』</p> <p>第5回 関連トピックス MDG からSDG へ</p> <p>第6回 開発経済学の系譜：『開発の政治経済学』第1章構造主義</p> <p>第7回 開発経済学の系譜：『開発の政治経済学』第2章新古典派アプローチ</p> <p>第8回 開発経済学の系譜：『開発の政治経済学』第3章改良主義</p> <p>第9回 開発経済学の系譜：『開発の政治経済学』</p> <p style="text-align: center;">第4章開発経済学のパラダイム転換1</p> <p>第10回 開発経済学の系譜：『開発の政治経済学』</p> <p style="text-align: center;">第4章開発経済学のパラダイム転換2</p> <p>第11回 21世紀の開発戦略と世銀：構造調整から統治へ</p> <p>第12回 『世界開発報告2015』と『世界開発報告2016』の主要トピックス</p> <p>第13回 <i>World development Report 2017; Governance and the Law, overview</i></p> <p>第14回 <i>World development Report 2017; Governance and the Law, overview</i></p> <p>第15回 総括</p>	
事前学習の内容・学習上の注意	<p>指定したテキスト『テキストブック開発経済学』、『開発の政治経済学』を事前に読んでおくこと。</p> <p>必要に応じて、授業終了時に、次回の資料や論文を配布するので読んでおくこと。</p>	
テキスト	<p>ジェトロアジア経済研究所他編『テキストブック開発経済学第3版』有斐閣2015年；絵所秀紀『開発の政治経済学大6版』日本評論社2002年</p>	
参考文献	<p>WB, 『世界開発報告2015--心・社会・行動』、概観</p> <p>WB, 『世界開発報告2016--デジタル化がもたらす恩恵』概観</p> <p>WB, <i>World Development Report 2017; Governance and the Law, overview</i> (3点ともウェブから読めます)</p>	
成績評価方法と基準	<p>担当箇所の報告と問題提起(50%)、質疑応答への参加(50%)</p>	

科目名	開発のミクロ経済学	2 単位
担当者	岡本真理子	
テーマ	発展途上国の諸事象をミクロ経済学で読み解く	
科目のねらい	<p><キーワード> ミクロ経済学、発展途上国、経済開発、個人の選択、インセンティブ</p> <p><内容の要約> 資金や人材の制約が多い発展途上国で、当事者に良い行動を促すインセンティブをどのように制度に内蔵するのかということは、開発関係者によってかなり重視されるようになってきた。この制度設計において、発生した問題をミクロ経済学的視点から分析することが役立つ。</p> <p>この科目では、発展途上国に特徴的な組織や制度のもとで生じる諸問題は、これらの担い手が、ある条件下で、それなりの合理性をもって選択し行動した結果であるとの前提にたち、それら事象を、ミクロ経済学的分析を通して深く理解し、また分析の枠組みを身につける。</p> <p><学習目標> ・ミクロ経済学の基本を理解する。 ・途上国の諸問題の背後にある要因や発生メカニズムを理解する。 ・現地の問題解決において、適切な選択肢を考えることができる。</p>	
授業の進め方	第1回 導入とウォーミングアップ課題 第2回 ウォーミングアップ問題の回答 第3回 零細自営業者や小農の経済学（ハウスホールド・モデル） 第3回 関連トピックと議論 第4回 途上国の信用市場 第5回 関連トピックと議論 第6回 貧困層の賃金はなぜ低いままか 第7回 関連トピックと議論 第8回 貧困の罠からの脱出 第9回 関連トピックと議論 第10回 マイクロ・クレジットの経済学 第11回 関連トピックと議論 第12回 共同体と開発（「コモンズの悲劇」） 第13回 関連トピックと議論 第14回 開発とガバナンス（汚職問題） 第15回 関連トピックと議論	
事前学習の内容・学習上の注意	経済学出身者でなければミクロ経済学の基本概念になじみがないかもしれない。しかし、インターネット上で検索すると解りやすい解説が出回っているので、テキストや議論で基本概念に関わる用語に出会ったときに、解説サイトをいくつか見比べて入手してほしい。また、小さなことでも解らないことがあれば積極的に質問してほしい。	
本科目の関連科目	マイクロファイナンス論、	
テキスト	黒崎卓・山形辰史著『開発経済学』日本評論社、2003年	
参考文献	バナジー&デュフロ著『貧乏人の経済学』2012 みすず書房 清水克俊・堀内昭義『インセンティブの経済学』2003 有斐閣 ダン・アリエリー『嘘とごまかしの行動経済学』2012 早川書房	
成績評価方法と基準	担当箇所の報告（50%）、質問や討議への参加（50%）	

科目名	参加型開発論	2 単位
担当者	野田直人	
テーマ	外部者が計画を立てて主導する開発アプローチは、不確かな仮説が入りやすく機能しない場合が多い。外部者は、当事者が主体となる参加型開発をサポートする役割を担うべきである。	
科目のねらい	<p><キーワード> 参加型開発、内発的開発、住民主体、仮説のマネジメント</p> <p><内容の要約> 参加型開発は言葉やイメージが先行し、手法やツールを駆使して住民の参加を促すことだと思われがちだが、そうではない。住民にとっては生活そのものが開発のプロセスでありそこに外部者がどうかかわり、交わりを持つか、その時に外部者がどのように考え、どのような態度をとるかが参加型開発でもっとも重要な点である。</p> <p>参加型開発の意味を理解するために、まず開発協力の流れの中から、どのようにして参加型開発の概念が生まれてきたかを学ぶ。従来の経済開発や技術移転の背景にある概念と参加型開発理念との思想的あるいは方法論的な違いを踏まえ、プロセス指向と目的指向の対比を明確にする。さらに住民の主体的参加とは何であるかを考え、その障害となる「専門家（受講生）の思い込み」に焦点を当て、パラダイムシフトの実現を試みる。</p> <p><学習目標> 参加型開発の意味と外部者の役割を理解する。 計画に伴う仮説の分析ができる。</p>	
授業の進め方	第1回 配布資料の解説 第2回、3回 参加型開発の定義に関する議論 第4回、5回 技術協力の意味に関する議論 第6回 外部者の役割 第7回 仮説分析の説明 第8回、9回、10回 仮説分析の演習 第11回 仮説と参加型 第12回 仮説を避けるためのアプローチ 第13回 事例紹介 第14回 まとめ 第15回 質疑応答と課題の解説	
事前学習の内容・学習上の注意	講義開始時に配布するテキストを通読すること。 参考文献の内どれか少なくとも一冊を読むことが望ましい。	
テキスト	参加型開発論（別途メーリングリストを通して配布）	
参考文献	1. 『参加型開発と国際協力：変わるのはわたしたち』ロバート・チェンバース著、明石書店、2000年 2. 『開発フィールドワーカー改訂版』野田直人著、有限会社人の森、2016年 3. 『平和・コミュニティ研究 No.3』立教大学平和・コミュニティ研究機構編、唯学書房、2007年	
成績評価方法と基準	レポートのみで評価する。100点満点で60点以上を合格とする。講義の内容を正しく理解できていれば60点とし、自らの知見が加えられていたり、実際の案件の分析が正しく行われていたりすればその分を評価して加点する。 レポートでは自らの経験や関係する事例を題材にすることが推奨されるが、該当する案件がない場合、適当な文献を選び、その分析を行うこととする。	

科目名	開発評価論	2 単位
担当者	吉村 輝彦	
テーマ	「評価」の考え方を改めて見つめ直し、同時に、「評価」の視点から開発や地域づくりのマネジメントのあり方を構想する。	
科目のねらい	<p><キーワード> 評価、アウトプット、アウトカム、プロセス、地域マネジメント</p> <p><内容の要約> 近年、政策、計画や事業の進行管理を行うことは極めて重要になっている。すなわち、政策、計画や事業の実施過程を、定期的にモニタリングし、どれだけ個別施策や事業が実施され、どの程度計画目標や成果目標が達成されたのかということ、計画→実施→評価→改善というPDCA サイクルにおいて継続的に評価していくことにより、政策、計画や事業・プロジェクトの効果的な実施と運用が求められている。実際に、「評価」は、開発評価や事業・プロジェクト評価に限らず、幅広い領域で、その必要性と意義が認識され、多くの分野・領域で、様々な「評価」が行われている。</p> <p>この「評価」に関しては、誰が、何のために、どのような射程を持って、どのような観点から評価を行っていけばいいのか、どのように評価を行っていけばいいのか、プロセス評価をどのように行うのか、など様々な論点がある。本科目では、「評価」の考え方を改めて見つめ直し、同時に、「評価」の視点から開発や地域づくりのマネジメントのあり方を考える。</p> <p><学習目標></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「評価」に関わる基本的な事項を理解できる。 ・「評価」の視点から履修者自身の視点を相対化し、それぞれが直面している状況を深化させる機会にしていくことができる。 ・「評価」の視点から開発や地域づくりのマネジメントのあり方を構想できる。 	
授業の進め方	<p>第1回 ガイダンス</p> <p>第2回～第3回 「評価」の定義やその意義をめぐる議論</p> <ul style="list-style-type: none"> ・評価の定義や意義について、履修者それぞれが発題し、その内容を共有するとともに、議論する。 <p>第4回～第11回 テキストに基づく発表と議論（WEB 掲示板での議論）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・テキストをもとに、評価の理論的な側面及び実践事例について議論する。ここでは、評価の多様性を理解していく。議論では、具体的な事例に基づいて、理論的ならびに実務的な評価のあり方を検討する。適宜、評価に関わる参考文献や文書も使って議論を進める。 <p>第4回～第6回 「第Ⅰ部 参加型評価とは」</p> <p>第7回～第11回 「第Ⅱ部 参加型評価の実践」</p> <p>第12回～第14回 参考文献あるいは具体的な事例の評価文書に基づく発表と議論（WEB 掲示板での議論）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・参考文献について、特に、考え方に焦点をあてて、議論を進めていくこと、あるいは、JICA などのプロジェクトに関わる具体的な事例の評価文書をもとに議論を進めることを想定している。 <p>第15回 振り返り</p>	
事前学習の内容・学習上の注意	<ul style="list-style-type: none"> ○指定したテキストを事前に読んでおくこと。 ○関心がある分野の評価の取り組みに関して、JICAなどのプロジェクトでは、実際にどのように行われているのか、その内容について事前に確認しておくこと。 ○日頃から「評価」に関わるトピックスを意識しておくこと。 	
テキスト	<ul style="list-style-type: none"> ○メインテキスト：源由理子編著（2016.11）「参加型評価～改善と変革のための評価の実践～」晃洋書房（2,700 円+税） ○サブテキスト：三好皓一編（2008.1）「評価論を学ぶ人のために」世界思想社（2,000 円+税） 	

<p>参考文献</p>	<p>○キャロル・H・ワイス、佐々木亮監修（2014.3）「入門 評価学・政策・プログラム研究の方法」日本評論社（6,000 円+税）</p> <p>○フェッターマン、ワンダーズマン編著、笹尾敏明監訳（2014.1）「エンパワメント評価の原則と実践」風間書房（3,500 円+税）</p> <p>○佐々木亮（2010.10）「評価論理-評価学の基礎」多賀出版（2,800 円+税）</p> <p>○安田節之・渡辺直登（2008.7）「プログラム評価研究の方法」新曜社（2,800 円+税）</p> <p>○NPO 法人アークス編（2003.9）「国際協力プロジェクト評価」国際開発ジャーナル社（1,500 円+税）</p>
<p>成績評価方法と基準</p>	<p>原則として、担当者あるいは指定討論者としての参加（30%）、議論への参加度合い（30%）とレポート（40%）の方法で評価を行い、全体で 60%以上を合格とする。</p>

科目名	地域社会開発論	2 単位
担当者	平野隆之	
テーマ	地域共生社会を目指す開発の方法—マネジメントを学ぶ	
科目のねらい	<p><キーワード> 地域共生、開発福祉、まちづくり、地域福祉、マネジメント</p> <p><内容の要約> テキストを購読しながら、地域共生社会の開発を目指すための方法を実践事例のなかから修得することを目指す。テキストにおける事例は、地域における実践の観察によりまとめられたものにとどまらず、実践に研究者が関与するなかで得られた内容を含んでいる。その意味では、学習者はそのような視点で、実践事例を理解しつつ、自身の実践の客観的な分析にも役立たせることを目指す。</p> <p><学習目標> 地域共生社会を目指す開発方法にどのような特徴をもつかを理解する。 地域課題や特性の違いを踏まえ、開発方法の適切な選択ができる。 地域社会開発に関する自身の実践の振り返りに役立たせ、事例研究が進めることができる。</p>	
授業の進め方	<p>各受講生が分担によるテキスト発表（10回）によって授業を進める。福祉の知識が多く求められるので、その点での解説を事前に行うように配慮する。発表内容については、自身の実践に関連した観点からの報告が多く含まれることも、有益と考えている。</p> <p>負担からも知れないが、著書前回は読了することを目指す。</p> <p>第1回 「はじめに」とテキストのスキミング（どの章に関心があるか）</p> <p>第2回～第3回 第1章 開発福祉という新たな概念の理解</p> <p>第4回～第5回 第2章 開発研究の視点から開発福祉を理解する</p> <p>第6回～第7回 第3～6章 集落福祉の挑戦のそれぞれの取り組みにみる生産と福祉の融合のための方法を比較検討する。</p> <p>第8回 各章の事例の分析方法について比較検討する。</p> <p>第9回～第10回 第7～8章 都市部における福祉とまちづくりの融合の比較検討を行う。</p> <p>第11回 第9章における韓国と日本の事例における福祉とまちづくりの比較検討を行う。</p> <p>第12回 第10章における被災地における地域社会開発の方法を学ぶ。</p> <p>第13回～第14回 第11章と第12章の障害分野における地域共生社会の開発方法を比較検討する。</p> <p>第15回 第13章と第14章において、地域共生の開発をケア(政策)から理解する。</p>	
事前学習の内容・学習上の注意	授業開始までに指定テキストを入手し、各自の興味を踏まえて担当を希望する章を検討しておくこと。テキストは入手に時間がかかる（在外からは特に）ため、受講予定者は、早目に手配しておくことが望ましい。	
本科目の関連科目	福祉社会開発論	
テキスト	日本福祉大学アジア福祉社会開発研究センター編『地域共生の開発福祉—制度アプローチを越えて』（ミネルヴァ書房）	
参考文献	穂坂光彦・平野隆之他『福祉社会の開発』（ミネルヴァ書房）	
成績評価方法と基準	文献の講読による発表、議論への参加度（60%）、レポート（40%）の方法で行い、全体で60%以上を合格とする。ただし発表、議論に十分に参加されていることを、期末レポート提出の要件とする。	

科目名	環境計画論	2 単位
担当者	千頭 聡	
テーマ	持続可能な開発と社会形成を実現していくための基盤となる環境の保全や管理・活用について、概念や基本的な考え方を学ぶとともに、ESD の考え方についても実践的に学びます。そして、環境（問題）に対して、我々がどう対応していくべきかを、院生相互の議論などを通じて考えていきます。	
科目のねらい	<p><キーワード> 持続可能な開発(SD)、持続可能な開発のための教育(ESD)、環境共生、環境計画</p> <p><内容の要約> 1992 年の国連地球サミット以降、持続可能な開発を目指す様々な動きが進められているが、先進国と発展途上地域との格差は縮小せず地球温暖化防止をはじめとした取り組みは、必ずしも順調には進んでいません。そこで、改めて、人間社会との関係性の中で環境をどうとらえ、環境資源をどう公正に利活用していくべきなのかについて、根源的な概念を解きほぐした文献および近年の動向をもとに、皆さんと議論していきたいと思ひます。 また、2015 年のユネスコ ESD 世界会議などの成果も踏まえつつ、ESD の考え方と実践方法についてもテキストに基づいて議論したいと思ひます。</p> <p><学習目標> 持続可能な開発および ESD、環境資源の管理と利用に関する理念的な枠組みが理解できるとともに、環境問題に対するアプローチの基本的な考え方を獲得することができる。</p>	
授業の進め方	<p>テキストのいくつかの章について、受講生で分担しながら、内容の紹介、議論すべきポイントの提起と受講生による議論により、環境計画という概念の共通理解を図ります。合わせて、院生自身の問題認識に基づき議論を深めていきます。</p> <p>第 1 回 ガイダンス 第 2 回から第 7 回 環境計画論の基本的考え方についてテキストを分担して解説 第 8 回から第 12 回 ESD に関して、テキストに基づき議論 第 13 回から第 14 回 MDGs から SDGs に至る動向について解説 第 15 回 まとめ</p> <p>なお、受講生の人数や関心領域に応じて、適宜、学習内容の変更やテキストの追加・変更を行います。</p>	
事前の内容学習上の注意	<p>○テキストの担当章については、事前に精読のうえ、内容の要約、議論のポイントなどを他の受講生に示し、議論を誘発するように取り組むこと。</p> <p>○担当章以外についても、あらかじめ一読し、自らの考え方をまとめておくこと。</p>	
テキスト	<p>○テキスト 1：末石富太郎＋環境計画研究会(1993)「環境計画論」森北出版 (必要ヶ所の PDF 化と配布を行う予定)</p> <p>○ テキスト 2：名古屋市(2015)「ESD はじめての一步」 (PDF ファイルを配布予定)</p> <p>○ その他、適宜関連資料を配布予定</p>	
参考文献	<p>今後、随時、情報提供していきますが、たとえば以下のような書籍があります。</p> <p>○ 小宮山宏編 (2008)「サステナビリティ学への挑戦」岩波書店 (2,900 円＋税)</p> <p>○ 松下和夫編著 (2007)「環境ガバナンス論」京都大学学術出版会 (4,200 円＋税)</p> <p>○ 井上真・宮内泰介編 (2001)「コモンズの社会学」新曜社 (2,400 円)</p> <p>○ 三村信男他編 (2008)「サステナビリティ学をつくる」新曜社 (2,900 円＋税)</p>	
成績評価方法と基準	原則として、担当者としての参加 (40%)、議論への参加(30%)、最終レポート(30%)として、総合計で 60%以上を合格とする。	